

哲学者の言葉より（その3）

吉田健太郎

（愛知教育大学社会科教育講座）

今回は近世の哲学者スピノザ（1632 - 1677）の主著である『エチカ』から3つの文章を取り上げる。2021年度の「哲学演習A」の授業で取り扱った内容に基づいている。当初の予定では今回で終了するはずであったが、次号でニーチェを取り上げて終了としたい。

（1）

いかなる点で人間精神が他の精神と異なるか、いかなる点で他の精神より優秀であるかを決定するためには、すでに述べたように、その対象の本性、つまり人間身体の本性を認識することが必要である。……ある身体が、同時に多くの働きをなし、多くの働きを受けることにたいして、他の身体よりもより有能であるに従って、その精神もまた多くのものを同時に知覚することにたいして、他の精神よりもそれだけ有能である。また、ある身体の活動がその身体のみ依存することがより多く、他の物体に共同して働いてもらうことがより少ないに従って、その精神もまた判明な認識にたいしてそれだけ有能である。

（『エチカ』第二部定理 13 備考）

<解説>

人間精神とは「身体の観念」である。

ここで注目されるべき点は2点ある。一つは、精神は実体ではなく、実体（思惟属性）の様態であると解されていること。もう一つは、精神は、その対象である身体との関係を離れては存在することができないこと。

伝統的には、精神は「実体」であり、観念や思考は「様態」であると理解されてきたと思われる。実体ないし主体としての精神が、諸々の観念を産み出しているという図式で捉えられている。しかしスピノザによれば、人間精神は人間身体を対象として表現する、一つの観念に他ならない。諸物体の生成変化の系列のうちに、各人の身体に生ずる生成変化が位置付けられるように、それと並行して、諸物体の生成変化を表現している観念の系列があり、各人の身体に生ずることがらを表現する観念は、その系列のうちの一コマとして位置付けられる。実体としての私が何かを考えているというのではなく、思惟する事物としての神（自然）のうちで、何らかの思考が生じているといった感じであろうか。その思考が精神と呼ばれているにすぎない。いずれにしても、観念とは別に、観念の基体としての精神なるものは存在しないということになる。

スピノザによれば、人間精神の現実的有を構成するものは、現実に存在する人間身体を対象とする観念以外ではありえない。そうだとすれば、観念であれば必然的に人間精神に属するというわけではないことになる。たとえば三角形の観念は、現に存在する人間身体において生じていることがらを表現している観念の一つではないかぎり、人間精神の本性を構成する観念とは言われない。

ところで、デカルトは精神と身体の実体的区別を主張したがために、心身の合一という経験的事実をどのように説明するかが課題として残されることになってしまった。しかしスピノザによれば、精神とは身体を対象として表現している観念であるから、そのこと自体が、おのずと心身の合一を示しているのである。何かを対象として表現する在り方が、思惟属性の様態としての観念の在り方であった。したがって、自己固有の身体を対象とする観念、すなわち精神は、対象としての身体から独立して別個に存在するものではありえない。また、精神は身体の観念であるかぎり、精神は身体のうちに生じているあらゆる状態を、そのことを意識するかどうかとは関係なく現に表現していることになる。たとえば、喜びの感情は、身体の活動能力が以前より促進され増強されつつある移行状態を、思考のうちに表現している思惟様態ということになる。

したがって、精神を身体や物体から分離独立した純粹思惟として捉える発想はスピノザにはない。むしろ、人間精神が他の精神（たとえば植物や動物の知覚能力）より優れている理由を、対象としての人間身体のもつ在り方に求めている。人間精神が優れていると思われるのは、人間精神が身体や物体とは無関係に存在し活動することができるからではない。人間身体が他の物体よりもより多くの仕方で、外部の物体から影響を受けることができるという点にこそ人間身体の優秀性があるのであり、そのことが翻って人間精神の優秀性を示しているのである。人間身体がより多くの外部物体と関わることができ、外部の物体を自己の存在のために利用できる能力に優れているということが、人間精神がより多くのことを知覚することができることを示している。人間身体に比べてより単純な構造しかもたない事物は、より単純で少しのことしか知覚できないということになる。知覚における単純性は、同時に感情における単純性につながるだろう。植物は、おそらく喜怒哀楽の感受という点において、人間に比べれば極端に制限されているに違いない。

十全な認識という点でも、精神は対象である身体の本性と相関関係にある。身体の活動がその身体の本性のみに依存することがより多いこと、そのことと相関して、精神はより多くのことを十全に認識している状態にある。身体であれ精神であれ、外部から受けた力に対して、それ自身の本性の力のみによってその外部の力に対処することができるなら、より能動的に活動しようということになる。たとえば、ある外部の物体から身体が影響を受けるとき、その外部物体の力によって身体自身の力が阻害されるだけではなく、外部物体の本性と身体の本性との間により多くの本性上の一致点を身体自身がキャッチする場合には、身体は自身の本性の力のみによって外部物体に対して、外部物体の力を自己の存在維持に活用するという仕方で能動的に対処できていることになるだろう。そして並行関係にある精神（身

体の観念)は、外部物体についてより多くの十全な認識をもちうる状態にあるだろう。

いずれにしても、スピノザにあって精神すなわち身体の観念は、身体の状態と無関係に存在することはできない。しかし注意すべき点は、精神と身体はあくまで「並行関係」にあるのであって、身体が活動の原因となって精神の活動を引き起こしているのではないということである。同一の自然が、「思惟」と「延長」という別の属性のもとで、一方は観念の系列として、他方は運動の系列として、並行的に展開されているといったイメージである。したがって、身体において能動的であることは精神においても能動的であり、同じことが受動についてもいえる。通常は、心身の間では一方が能動なら他方は受動であるとして、両者の相互作用関係が想定されることが多い。しかしスピノザは、心身関係をあくまで並行関係として捉えているのである。

(2)

衝動とは人間の本質そのものである。自己の維持に役立つすべてのことは衝動から必然的に生じ、結局のところ人間にそのことを行わせるのである。衝動と欲望の違いはといえば、欲望は自らの衝動を意識している限りにおいて、もっぱら人間について言われるというだけのことである。それゆえ欲望とは意識を伴った衝動であると定義することができる。

(『エチカ』第三部定理9備考)

<解説>

スピノザによる「本質」の定義は次のようなものである(第二部定義2)。

「それが与えられれば、ある事物が必然的に定立され、それが除去されれば、そのある事物が必然的に滅びるようなもの」(①)

「それがなければ、ある事物が存在することも考えられることもできず、逆にまた、そのある事物がなければ、それが存在することも考えられることもできないもの」(②)

伝統的に人間の本質は「理性的であること」と定義されてきた。それなのになぜスピノザは人間の本質を「理性」ではなく「衝動」として定義するのだろうか。現に存在する人間から理性が除去されると、それとともに必ず人間が存在することができなくなるのであれば、理性は人間の本質であることになる(①より)。しかし、ある人が理性的ではなくなっても、その人は存在し続けることができると考えられる。あらゆる人間のすべての活動は理性を原因として産出されるのであれば、理性が人間の本質であるといっていいたいだろうが、人間の活動は必ずしもすべて理性に導かれるものではないとすれば、人間の本質は理性であると定義することはできない。

定義②は、「本質」は事物の固有性(固有の在り方)を説明するものであって、単なる一般的特性や共通概念ではないということをいっている。定義②の後半部からは次のようなことが導かれる。もし人間の本質が「理性的であること」であるとすれば、人間が現に存在しなくなると、それとともに「理性」も存在することを止めることになるわけだが、人間以

外にも理性的でありうる事物が存在することは十分思考可能であるかぎり、理性を人間存在に固有のものとみなすことはできない。ちなみにスピノザによれば、「理性」とは事物の共通概念であるから、事物に固有の「本質」を説明することはできない。

ところでスピノザによれば、あらゆる事物は自己の及ぶ限り自己の有に固執するように努めている。この「自己の有に固執しようと努める努力（コナトゥス）」こそが、事物の現実的本質に他ならない。存在する事物におけるあらゆる活動が、「自己の有に固執しようとする努力（コナトゥス）」を原理・原因として十全に説明することができるのであれば、たしかにコナトゥスは前述の定義①②の条件を満たしていることになる。理性的に活動する場合であれ、感情に流されて受動的に活動する場合であれ、外部の力によって凌駕されることがないかぎり、人間は自己の存在に固執することを放棄することはない。あらゆる活動はこのコナトゥスを根源的原理としてもっている。もちろん、各々の事物は個物であるかぎり、それぞれ固有の本性をもつからには、コナトゥスも個物ごとに区別されて存在することになる。ところで「衝動」とは、外部からの影響を受けて具体的に規定されたコナトゥスであると捉えてよいだろう。さらに意識されるかぎりでの「衝動」が「欲望」というわけである。そうだとすれば、現に存在するかぎりの人間の本質は、むしろ「欲望」であるということになるだろう。

人間の本質を欲望として定義する発想は、哲学史において異端に映るかもしれない。欲望は理性によって制御されるべきものとして、ネガティブに捉えられてきたように思われる。しかし、ここでスピノザがいうところの「衝動」や「欲望」とは、事物が自己固有の有に固執しようと努める努力、いわゆる「自己保存欲求」のことだと捉えれば、生物である限りの人間の活動原理を何よりもまず「自己保存欲求」に基づけて理解することは自然なことと思われる。しかし、人間の本質を欲望によって定義することは、人間を他の動物と同列に置くことになるのではないのか。ここで言われる「自己の有に固執する努力」は、各自の固有な在り方に固執する力であるから、人間には人間固有の努力が存しており、人間を他の事物と同列に置くものではない。むしろポイントは、事物の本質は固有の活動能力によって説明されるべきであって、事物の共通特性や事物の単なる形態的特徴によって説明されるべきではない、という点にある。

各人のうちには、各人固有の在り方に固執する力が現に働いており、その力は自己の外部の力との相互関係において、状況に応じて具体的に、特定の量と質をもった力として決定されることになる。それが各人の「衝動」であり、それが現に意識されているなら「欲望」といわれるわけである。各人は「欲望」という仕方で、各人のコナトゥスを感じ受けているというわけである。

(3)

いかなる個物も、より長い時間のあいだ存在に固執したからといってより完全であるとは言われない。事物の本質は何ら一定の存在時間を含ないから、事物の持続はその本質から

決定されないからである。むしろ各々の事物は、より多く完全であっても、より少なく完全であっても、それが存在し始めたのと同じの力をもって常に存在に固執することができるであろう。したがってこの点においては、すべての事物は同等なのである。

(『エチカ』第四部序言)

<解説>

事物の「完全性」とは何か。

人間も存在する事物であるが、人間における「完全性」とは何か。人為的に制作された道具の場合には、その用途や目的が決まっているので、その目的をどれだけ果たすことができるかによって、その完全性の度合いを測ることができるかもしれない。ジグソーパズルを完成させる場合を想定すると、完成されたパズルは「完全」であるが、未完成の状態にあるパズルは「不完全」であるということができるだろう。では、人間の場合はどうか。人間が何かゴール（目的・目標）に向かって進んでいる存在であるとすれば、そのゴールに到達したかどうか、どれだけゴールに近づいているかによって完全性の度合いを測ることができるかもしれない。しかし、まさか人間における死が人生の完成であるとは思われぬし、すべての人が一致してそれを到達目標とするようなゴールが人生に存在するとも思えない。そうだとすれば、スピノザが事物における完全性に言及するとき、とりわけ人間における完全性についてどう考えていたのだろうか。

スピノザによれば、事物の「完全性」と事物の「実在性」は同義である。したがってまず言えることは、事物には本性的に「不完全性」が備わっていることはありえないということである。事物のうちに「非実在性」（ないこと）があるというのが矛盾するように。それゆえ、事物には「本性的欠如」はありえないと思われる。しかし、生まれつきの障害や欠如といったものがあるのではないだろうか。だが、何を基準にして「欠如」や「不足」が言われるのか。当然そこには「あるべき理想」「当然あるべき規範」が前提されているはずである。それと比較するかぎりにおいてしか「欠如」は意味をもたない。では、障害をもって生まれてきたといわれる子どもは、本性的に何らかの能力を欠いているというべきなのだろうか。

スピノザによれば、各々の事物はその与えられた本性から必然的に生ずること以外のことは、そもそも為しえない。いかなる事物も、与えられた各々の本質において、状況に応じてできる限りのことを為している。障害をもっていると称される子どもは、本質において何かを欠いているわけではなく、あらゆる事物と同様に、当人に与えられた本質から生じうることをできる限り行うよう努めている。その限りにおいて、何ら「欠如」「不足」は存在しない。しかし、いわゆる障害者の本質と、いわゆる健常者の本質との間には、力量の差があるのではないのか。そして、健常者のほうがより優れた「本質」をもっている、より完全であるといわれるのではないのか。

論点は事物の「完全性」「実在性」がどのように規定されるかに関わるであろう。スピノザによれば、各自の活動が自らの本性の力のみによって説明される場合がより多ければ多

いほど、それだけより多くの完全性を有しているといわれるのであった。たしかに各々の事物に与えられた本質には、力量の差がある。しかしここで問題となっている「完全性」の多い少ないは、各自の本質がどれだけ外部の力から阻害されることなく、自らの本性の力のみによって能動的に活動しうるか、その度合いであった。完全性がより多いか少ないかは、他の本質との比較において言われるのではなく、各自における活動能力の変動に即して捉えられなければならない。

さらに、完全性の多い少ないは、自己の以前の状態よりもより多いか少ないかという形で、常に相対的比較においてのみ語られるものである。規範となるべきモデルとの比較ではなく、常により先立つ状態との相対的比較においてしか完全性の度合いを規定することはできない。要するに、事物の活動は常に生成変化の過程にあるということ、事物の生成変化は何らかのゴールに向かって進んでいるわけではないということである。ある時点での活動の「価値」を測ろうにも、「客観的基準」がないとすれば、以前の状態との相対的比較において規定するしかない。

自然において事物は常に外部から影響を受けずにはいられない以上、働きを受けない（受動的でない）ことはありえない。それゆえ、同一の事物でも、現に存在する間は、活動能力という点で完全性の推移を様々に経験することになる。したがって、どれだけ持続することができたかによって完全性の大小が規定されることはない。より長生きしたほうがより完全であるわけではない。事物の完全性は、あくまで事物の現に活動している在り方そのものによって規定されなければならない。しかも、各自の与えられた本質のみによって説明されることがどれくらいあるかによって、各自固有の完全性が規定されなければならない。

以上のことを踏まえるならば、単純に本質間の質的差異のみによって完全性の大小が語られるわけではないということになる。人間は鳥のように空を飛ぶことができないからといって、その点においてより完全性が少ないと規定されるわけではない。完全性は、その事物が「なしうること」において言われなければならない。与えられた本質の力能の範囲で「なしうること」をどの程度実行しえているのか、その度合いが問題となる。その限りにおいては、いわゆる障害者が健常者よりも完全性が少ないとは必ずしも言えないことになるだろう。異なる事物の間で共通に適用される比較基準が、外部から人為的に設定されるかぎりでのみ、事物の比較は意味をもちえる。問題となる完全性は各自固有のものに関わるのであれば、いわゆる客観的比較なるものは成り立たないことになるだろう。

スピノザ自身もそうした点を考慮したうえで、異なる事物の完全性の大小比較については言及を避けているように思われる。むしろ、あらゆる事物は「常に存在に固執することができる」という点において、同等であるという。すべての事物は、実体である神（自然）の一つの様態であるかぎり、各々の在り方において「存在に固執する」ことを通じて、神の本質（すなわち「存在すること」）を表現していることになる。その限りにおいて、あらゆる事物は全く同等の価値をもっているのである。